

飯島半十郎の生涯と思想(その二)

——『幼稚園初歩』の著者——

小林 恵子

(四) ざんぎり頭の開山となった三人

若い日の半十郎の人柄を示す逸話として、次の記事が明治三十四年八月五日の「毎日新聞」『飯島半十郎氏逝矣』の文中にみいだされる。⁽¹⁾「……氏は旧幕臣江戸の人成島氏(柳北翁)の下に騎兵差図役となり、維新の役三ヶ保丸に搭して脱走を謀り、後林昌之介に説きて其持船を廻らして箱館の戦に備へしめたるなど当時少壮有志者の名あり、磊落の性奇行亦尠からず、衆に先んじ矢野次郎、益田孝氏等と共に丁字髪を載ち所謂ざんぎり頭の開山たりしは今も世に伝ふるの話なり」このざんぎり頭の逸話は、彼が騎兵隊の指揮官として横浜太田の陣屋で仏人から兵式を学んでいた頃の話で、彼は次のように述べている。「其ノ学科極メテ多キヲ以テ農ヨリ昏ニ至ルマテ飲食結髪ヲ除クノ外寸暇アルコトナシ因リテ同寮益田某矢野某等ト議シテ曰ク若

髪ヲ斬リテコレヲ結フノ煩ニ代ヘハ或ハ全ク四肢ヲ休ハシムルノ時間ヲ得ント以テ奉行ニ請フ奉行許サス既ニ数日三人議ヲ決シテ私ニ髪ヲ斬ル奉行大ニ怒リテコレヲ幕府ニ訴ヘ罪スルニ七日ノ謹慎ヲ以テセラレ速ニ蓄髪スベキノ令アリキ」と。しかし「其ノ後末数月ナラスシテ兵隊中髪ヲ斬ルモノ漸多ク二年ノ後ニ至リテハ官吏中ニモ亦尤ニ倣フ者比々トシテ相踵ケリ」とあり、半十郎らの断髪が如何に時代を予知していたかが理解されよう。しかしこうした若い日の彼の行動には、幕臣として広敷番を勤める父、善蔵は困惑させられたようである。彼の容貌は魁偉であつて、問わざれば多くを語らぬという性質であつたが、誠に恬淡で義理堅い人物であつたと言われる。⁽²⁾
余談ではあるが、ここで「ざんぎり頭の開山」となった仲間(4)の二人について記しておきたい。一人は益田孝で、三井物産を

創設した人である。彼の妹、永井繁子⁽⁵⁾は明治四年、津田梅子ら五人と米國へ留学しており、その実現には益田が骨折つたようである。彼の自叙伝をみると布哇⁽⁷⁾の駐日公使となつたアルウィン⁽⁶⁾ (Robert Walter Irwin) のことがくわしく記載されている。このアルウィンは玉成高等保育学校の創立者、ソフィヤ・アラベラ・アルウィン (Sophia Arabella Irwin) の父であり、増田とは同じ会社⁽⁷⁾に勤務し親しい關係にあつた。アルウィンの名は忘れられているが、ハワイへ日本の移民を連れて行くようにしたのは彼であり、誠に篤実な立派な人物であつたと彼は自伝の中で述べている。⁽⁶⁾

「どんぎり頭の開山」となつた他の一人は矢野二郎⁽⁹⁾である。思ひがけなく彼の銅像をみたのは、東京・国立市にある一橋大学の校庭であつた。一橋大学の初代校長として日本の商業教育に貢献した人物である。彼の末妹栄子は益田孝に嫁しており、矢野と益田は騎兵隊に入る以前からの知友で共に西吉十郎の門人として英語を学び欧州に赴いている。両者の自伝には半十郎のことが記されていないところをみると、騎兵隊時代のみ⁽⁹⁾の知友にすぎなかつたのではあるまいか。この三人のうち半十郎が最年長であつたから、あるいは彼が音頭をとつて髪を断つたのではないかとも考えられる。矢野の伝記をみると「二郎一隊の長

となるや、古格を改め旧例を破り、服装馬具兵器総て無遠慮に洋式を採用し、洋語を朋友の間に用い動作も亦洋人に擬せしかば、頗る人の視聽を聳動し、或は黄色の仏人我隊中にありと評し⁽¹⁰⁾とあり、洋装好みの青年士官の三人の姿を思い浮べることができよう。余談ではあるが、矢野は他人の世話をよくした人で、ある不幸な女性を私立では最初に創立された桜井女学校の保姆科に入学させ、幼稚園教師として身を立てさせたことが自伝に記載されている。⁽¹¹⁾ 桜井女学校(女子学院の前身)の校長矢島樹子、教頭米人ツルーとは親交があつたらしい。

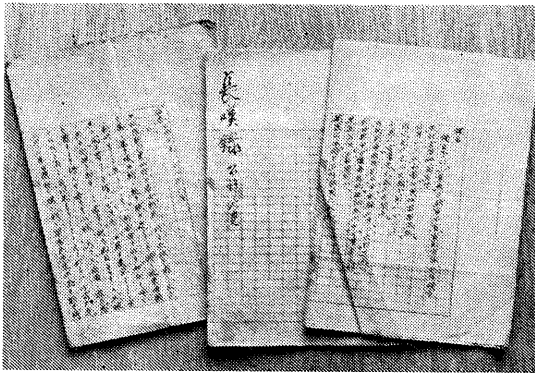
この太田陣屋に於ける伝習は慶応元年から三年までで、終には江戸に移し幕府と共に消滅に至つてゐる。

(五) 幕臣としての第二の人生

幕末から維新にかけての激動期は日本史上、もっともドラマチックな時期であり、急激な価値の転回に人々は翻弄された。半十郎は明治元年で二十七歳、血氣さかんで進取の氣性に富む彼にとつてもまた、この時期を転機として第二の人生が展開されていった。維新の戦火の折には、三ヶ保丸、回天丸に搭乗し仙台へ脱走、のち北海道、箱館で小金ヶ原の開墾に従事したらしい。この小金ヶ原の開墾は箱館へ脱走した人々の遺族を救済

するのが目的で、三井の三野村氏、及び北島時之助氏等の肝煎りで計画したのであったが、当時は武士気質の余風で遺族は、中々に集まらずに終ったようである。このとき父と弟も一緒だったという。⁽¹²⁾ やがて数年にして江戸へ帰国している。

こうして明治の時代を迎えるが、彼は何を考えていたであろうか。彼の残した未発表の手記「独言」や「言志」「長嘆録」には不許他見として彼自身の心中の思いが筆で書かれている。



▲ 写真1

(写真1参照)

明治二十八年に書いた「言志」(長嘆録と内容は同じ)の手記のなかで彼は「余は旧幕の遺臣にして実に其の失政を助けたる者なり何の面目ありてか又政を議するを得んや去りて山林に入り又海浜に遊び悠々日月を消し自以て足れりとする。此に二十有八年」と記し、幕臣としての維新後の生き方を述べている。彼の号「虚心」「局外閑人」は彼の姿勢をよく言いあらわしたものと言えよう。しかし手記のなかで彼は政治に対する意見を述べ「我国の前途果して如何せば可ならん……(略)愛国の情殆禁する能はざればなり嗚呼余が我国の前途を憂ふるは一朝一夕にあらざるなり」と記し末尾に、

国ゆたか たみやすかれとおもふかな

きみがこゝろに よしたがふとも

と歌を詠んでいる。幕臣として彼は心の奥深くに、他者に話すことの許されないさまざまな思いを持ちつつ耐えていたことが推察される。こうした手記をみると彼が如何に世界全体に視野をむけ、そこから日本の将来のあり方を深く考えていたかということが理解できる。彼がその後、地理教育に力を入れたことや、物理、歴史、道徳、家政学、幼児教育の分野の教科書にたずさわったこと、また新聞、雑誌の編集など多方面にわたる活

躍は、つまるところ世界における日本の国の将来を考えての意図から出発していたものと考えられる。そして後年、彼のライフワークとなった浮世絵研究も世界的視野にたつて日本独自の美を浮世絵に求め、これを正しく世に伝えることに意義をみいだしたのではなからうか。彼は「独言」で「天地有限、邦国有限、世界一王天命数、何国何君果為王、国大則人大大、国小則人小小、小国人有懼色、大国有驕色、(天地は限りあり。邦国も限りあり。世界一王天命数。何れの国の何れの君が果たして王とならん。国大にして則ち人大きく心大なり。国小にして則ち人は小さく心小さし。)」と述べ、「男児為大國小吏、无為小国大臣、有虎狼在後、中原欲逐鹿、危哉」(男児は大国の小役人となり小国の大臣となるなし。虎狼ありて後に在るに、中原に鹿を逐わんと欲するは危いかな)と警告を発している。虎狼とは英米独仏露などの諸外国をさし、中原とは国内で政権争いをしていくことの危険を述べている。さらに「我國、一幼稚園、講武興文、有名無実、作佞屈難読文、示懵々無知人、為何、(我が国は一つの幼稚園なり。武を講じ、文を興せども、名有りて実なし。佞屈(むずかしく)読み難き文を作り、無知の人に示して何をかなさん)と日本の国の精神面での未熟さを指摘している。幼稚園と譬えたのは、

まだ幼くてこれからであるという小児の未熟さをさしたものである。彼は日本の独立は富国強兵にあるとしているが、「真正文明国、蓋無甲兵具、(真正の文明国は、けだし甲兵具うることなし)とし、精神面の独立をまず主張している。こうした面から彼の第二期は日本の国が真正の文明国として成長するための一助として雑誌、新聞、教科書の編纂をおして文筆活動による啓蒙を行なったものと考えられる。幼児教育に関する文献も同じくこの趣旨から書かれており、日本の国が真の文明国として世界の国々と対等につきあうことのできるよう幼児期からの教育が是非とも大切と考えてのことであった。

(六) 「東京新報」(TOKYO NEWS)の編集

明治六年二月から六月まで週一回発行の新聞「東京新報」は十七号で終っているが、彼が編集者として最初に手がけた仕事であった。これは中村敬宇の支援によるもので基督教の色彩をもつユニークな新聞であった。東京大学の明治新聞雑誌文庫にある第一号(吉野作造博士の寄贈による)の表紙に「この新聞の発行者は基督教の信者らしい」と記されているが、彼が信者であったという記録は今のところ見いだせない。孫にあたる威次郎氏に聞いても、そのような話は父から聞いていないとのこと

とで、おそらく彼の酒好きからみても信者にはならなかったのではないか。むしろ彼は中村敬字の影響を受けて儒教による天(超自然的な一つの理法)の思想から基督教の神を理解し、編集に当たったものである。

この新聞の趣旨については第一号の緒言に「本局ヨリ出ス新報ノ主意ハ童蒙婦女子ヲ善道ニ導キ父兄師友ノ教諭ノ一助トナサント欲ス」とあり、人々の精神を高め、真の文明国となるための啓蒙が目的であった。彼は編集者として虚心堂の名を用い、本局を東京小石川大門町鷹金屋清吉方虚心堂に置き、売弘取次

写真2



の相談に応じている。売弘所は京都、大阪、東京各地の計八か所が名を連ねているが、この新聞がどれほど読まれたのか明らかでない。わずか四か月で廃刊されたとは、経済的にも成立しなかったのではないか。「東京新報」は明治九年敬字の好意で十字社書店から基督教の雑誌として再び出版(註)されているが、このときには半十郎は関係しなかったようである。

(七) 西教の神と「真神」

中村敬字は「東京新報」の第十一号(明治六年五月)に漢文で「西教無々君之弊」と題する文を書いている。これは当時の人々が基督教徒を君に不忠で、国を売る者と誤解するのでこの点を明かにすると同時に偏見を取去って基督教に傾聴すべきを勧告したものであった。こうした西教にみる基督教の God を、この新聞では「真神」という言葉に訳している。第十二号で亜米利加新聞紙より訳したとある「母の慈愛」と題する文では、母が我が子の病気に夜も寝ず看病する姿に真神を見るとき「真神の人民と相関係する事あた恰かも母と赤子せきしとの如し」「母は片時も小児を忘れざれども子は時として母の恩を忘る我等のこの天地間にあるは小児の母の懐抱中にあるが如し然るに真神を信ぜずして呱呱として常に泣き最愛の母を認め得ざるハ浅ま

しき事ならずや」と記されている。(6)

また半十郎が書いたと見られる「幼稚園金針二十八条」⁽¹⁷⁾には二十八項目に及ぶ徳育の指針のようなものが簡条書に列挙されている。

第一 真神ヲ敬畏スルハ智識ヲ開キ才能ヲ長ズルノ始ナリ

第二 真神ハ万事万物人ノ見聞セザル事ヲ知ル故ニ心中ノ善

悪人目ニ見エザルモノモ真神ノ炤察ヲ逃ルルヲ能ハズ

第三 災厄ニ罹ル不幸ノ人ヲ見棄ル事勿レ然ルトキハ真神マ

タ汝ヲ見棄ザルベシ

第四 父ノ慈愛ハソノ子孫ノ家ヲ繁昌ニシ母ノ憎悪ハソノ子

孫ノ家ヲ衰微セシムルナリ

第五 真神ノ曰ク人々互ニ救援補助スベシ余ハ汝等ヲ救ヒ助

クベシ

第六 怠惰ナル人ノ恒言ニ曰ク「余ハ善事ヲ為ス事ヲ欲スレ

ド財ナク力ナキヲ奈何」

第七 汝ノ田野ヲ耕シ収納ヲ得ル如ク汝ノ信心ニヨリテ汝ノ

身ニ収納アルベシ

(以下省略)

紙面の都合で割愛したが、ここには聖書や儒教の道徳倫理が引用され西洋と東洋の道徳が折衷して記載されている。こうした和洋の折衷主義は中村敬宇の師、朱子学の佐藤一斎の儒学に

みることができ。折衷主義は一斎の学問、処世のすべてを貫

いていたといわれる。⁽¹⁸⁾ その哲学は汎神論的であり、人はまた一

個の神的存在であった。昌平黌時代、一斎を師と仰いだ敬宇や

その弟子の半十郎は、その影響を受け儒教の天の思想から基督

教の神を理解し、宗教が道徳の根元であると捉えている。こう

した汎神論的立場にたつ神の観念は、ドイツ・スイスを中心と

する十九世紀の自由主義神学の立場と共通するものがあり、こ

の思想にはフレイベルの万有在神論と相通するものがあつた。

中村敬宇が幼稚園の創始者フレイベルの精神をいち早く理解し

共鳴していたこと、そして西欧の幼稚園を外形的な模倣として

でなく、その本質を把握し日本に移植しようとしていたことは、

こうした儒教の解釈と結びついて可能となっている。そして半

十郎は「幼稚園初歩」の書で、フレイベルの精神の理解から出

発しこれを日本独自のやり方に発展させていることが理解され

る。(つづく)

(国立音楽大学)

註

(1) 半十郎は八月一日没、享年六十一歳。この新聞は東京大学附

治新聞雑誌文庫に在中。

- (2) 飯島半十郎著「雑話」、『洋々社談』報知社 第二三号 明・
九 九
和十三年七月号
- (3) 玉林晴朗著「浮世絵研究の先覚者飯島虚心」、『書物展望』昭
和十三年七月号
- (4) 益田孝(嘉永元年1858)昭和十三年(1938) 佐渡生まれ幕臣
九十歳没
- (5) 益田の実妹であるが幼い頃、騎兵隊の医者永井文栄に養女と
なった。十一歳で渡米
- (6) 長井実著「自叙益田孝翁伝」内田老鶴圃 昭和十四年 p.418
421 167~170
- (7) 横浜のアメリカ商館ウォールシ・ホールで亜米一とも言っ
た。
- (8) 長井実著 前掲書 p.418
- (9) 矢野二郎(弘化二年1855)明治三十九年(1906) 江戸生まれ 幕
臣 六十二歳没 矢野次郎とも言う。
- (10) 島田三郎編著「矢野二郎伝」実業之日本社 大正二年 p.37
- (11) 島田三郎編著 前掲書 p.158
- (12) 大曲駒村著「飯島虚心翁」『書物展望』昭和九年
- (13) これらの手記は、飯島家に保存されていたもの。
- (14) 横書の「TOKIO NEWS」と書き表紙のカットも自分で画いた
- (15) 明治九年十二月、原胤昭の十字屋書店から発行。編集者は鈴
ようである。(写真2参照)
- (16) 中村敬宇が訳し紹介したものと思われる。
木鏡。
- (17) 「幼童金針二十八条」は東京新報第十五号(明治六年六月)
中村敬宇の著書は漢文と平仮名で区別されていた。
- (18) 高橋昌郎著「中村敬宇」吉川弘文館 昭和四十一年
p.10~11

